

# 江戸時代長崎に来航した上海船

松 浦 章

## Shanghai Junks that came to Nagasaki during the Edo period

MATSUURA Akira

In the Edo period, Japan limited trade with foreign countries to China and Japanese orchids through Nagasaki in Kyushu. The merchant ship, Chinese Junks that arrived in Nagasaki from Gangnam in China was called the Nanjing ship. The Nanjing ship came from the port of Changjiang Exit instead of the current Nanjing. In particular, it can be seen that most of the Nanjing vessels that arrived in Nagasaki after the Qing Dynasty's Great Clearance came from Shanghai.

Therefore, I would like to talk about the Sino-Japanese trade that developed between Shanghai and Nagasaki in the early Qing dynasty.

Keywords: Qing dynasty, China, Nanjing Junks, Shanghai, Nagasaki

キーワード：清代 中国 南京船 上海 長崎

### 一 緒言

日本の江戸時代において中国との関係は、主に長崎を通じて行われていた。江戸幕府は対外政策を厳しく制限し、日本船の海外渡航を禁止し、外国船の日本来航は九州の西部の長崎港に限定し、しかも外国は和蘭と中国のみに制限していた。

このため江戸時代の日本人は中国に関する認識は極めて限定的であった。長崎の医師で外国事情に通じていた西川如見は『増補華夷通商考』<sup>1)</sup>を著し、長崎で得られた外国事情をまとめた。その中で、中華十五省、そして外国として朝鮮、琉球、大宛（タイワン）、東京（トンキン）、交趾（カウチイ）ついで外夷として占城（チヤンハン）、柬埔寨（カンボウチヤ）、太泥（タアニイ）、六甲（ロツコン）、暹羅（シヤムロウ）、母羅伽（モヲカ）、莫臥爾（モーウル）、咬啗吧（カラバア、ジャガタラン）、爪哇（ジャア）。番旦（バンタン）、阿蘭陀（ヲランダ）の諸国の地誌について述べ、最後に外夷増附録として韃靼、回回

---

1) 西川如見『増補華夷通商考』、瀧本成一編『日本經濟藏書』巻5、1914年10月、205-314頁。同書の原本は宝永五年（1708）三月刻である。

等について記している。もっとも記述の多いのが中華十五省である。中華十五省は二京とし南京（ナンキン）、北京（ホツキン）<sup>2)</sup> から記述され、最初が南京から始まる。

この南京には蘇州府、松江府、揚州府、常州府、崇明縣、淮安府、鎮江府、應天府などについて記述されるが、上海についての記述は見られ無い。

そこで、本論において江戸時代の日本人にとって上海に関する認識はいつ頃始まるのかに関して検討してみたい。

## 二 江戸時代に長崎に来航した南京船

西川如見の『増補華夷通商考』巻一において、南京に関して次のように記している。

春秋ノ呉國也。古ハ金陵ト云リ、城下ヲ應天府ト云。唐ノ時ニ江寧ト云是也。唐土第一之上國也。今清朝モ天子ノ親屬ヲ以テ城主トス。京城ノ周廻凡日本道十七里ナル由。城内ノ宮殿其美麗ヲ盡セリとトゾ。<sup>3)</sup>

春秋の時の呉国について述べ、古くは金陵とも呼ばれた。その城下は應天府と言う。唐の時には江寧と言ったのである。中国第一の国である。清朝の皇帝も親族をその長官にしている。宮城の周囲は日本の距離で十七里（約68km）ある。城内の宮殿は極めて綺麗なものであると記述した。

ここで述べる南京とは、現在の南京ではなくて、広範な江南全体を述べる言葉として使われているのである。このように、江戸時代の日本人にとって南京は江南を意味する語彙として使われていたことがわかる。

江戸時代に長崎に来航した中国船いわゆる唐船が南京についての説明をするのは、貞享四年（康熙26、1687）四月十六日に到着した56番南京船である。

南京の儀は、先朝大明之初めには帝都にて、南京とも申、金陵とも申候、明朝数代の後、只今の北京を帝都に構被申事に御座候。……<sup>4)</sup>

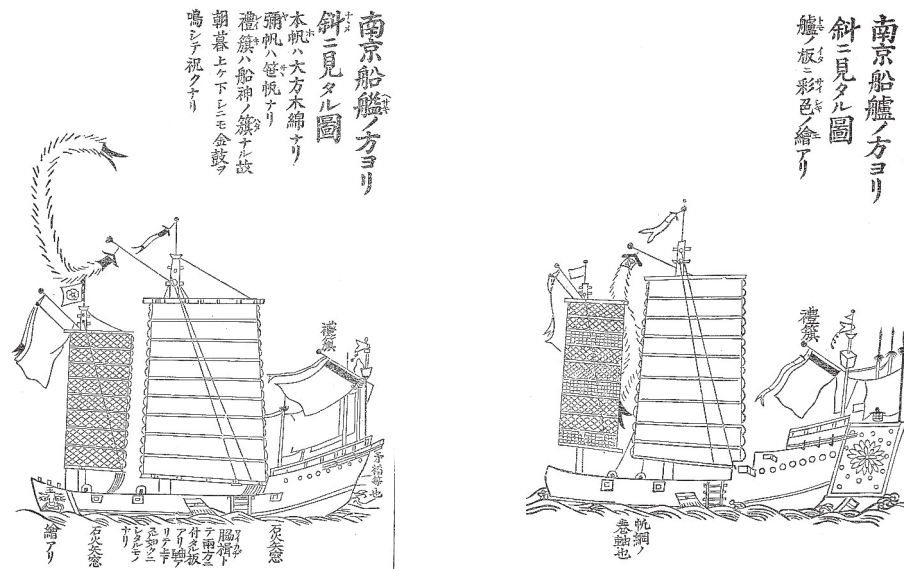
南京は、先の王朝であった明の初めに帝都となり、南京と呼ばれ、金陵とも呼ばれていた。明朝の数代の後に、今の北京に帝都を構築されたと説明しているのは、まさしく現在の南京のことである。建国の洪武帝、次代の建文帝の時代は帝都は南京であったが、永楽帝の初期到北京に遷都されたことを報告したのであった。

2) 以上の地名のカタカナ表記は、西川如見『増補華夷通商考』による。

3) 西川如見『増補華夷通商考』、瀧本成一編『日本經濟藏書』巻5、211頁。

西川如見著、飯島忠夫・西川忠幸校訂『日本水土考・水土解弁・増補華夷通商考』岩波書店、1944年8月第一刷、1988年11月第二刷。73頁。

4) 『華夷変態』上冊、財団法人東洋文庫、1958年3月、716頁。



『増補華夷通商考』巻二（『日本経済叢書』巻五、1914年10月、242、244頁）

しかし、この説明とは別に、江戸時代の日本では、南京は江南の意味として使われ、来航した唐船を南京船と呼称していた。南京船と呼称された草創期の唐船は、延宝三年（康熙14、1675）七月三日に長崎に来航した20番南京船であった。この船は遷界令下の「南京にて私共船仕出し申候」<sup>5)</sup>と、南京から私たちの船が出帆して来ましたとしており、南京とあるが、現在の南京ではなく、長江口付近の港からひっそりと出帆してきたと思われる。この船は、長崎において中国での兵乱の事情を伝え、康熙帝の清朝軍と雲南に依拠する平西王呉三桂、廣東の平南王、福州の靖南王等のいわゆる三藩とが対峙していることを報告した<sup>6)</sup>。

つづいて同年十二月二十二日の29番南京船が知られる<sup>7)</sup>。この船に関しては「南京出船」<sup>8)</sup>とあり、これもおそらく長江口付近から出帆してきた船であった。この船は、長崎で、呉三桂側と靖南王側や鄭成功ならびに平南王側の情勢を報告している<sup>9)</sup>。

翌延宝四年（康熙15、1676）四月二十日に長崎に入港した4番南京船頭彭公尹船<sup>10)</sup>は、「大明拾五省之内」<sup>11)</sup>として、清朝に対峙した地域を大明と称し、清朝に降伏した地域とを区別して報告している。この船が出帆した地に関して「私共出船仕候南京之内、崇明と申所」<sup>12)</sup>と、この船が出帆した南京の治下の崇明と言う所と、長江口の崇明島であったことがわかる。

5) 『華夷変態』上冊、121（119-121）頁。

6) 『華夷変態』上冊、191-121頁。

7) 『華夷変態』上冊、139-141頁。

8) 『華夷変態』上冊、139頁。

9) 『華夷変態』上冊、139-141頁。

10) 『華夷変態』上冊、148-149頁。

11) 『華夷変態』上冊、148頁。

12) 『華夷変態』上冊、149頁。

延宝五年（康熙16、1677）正月十三日の1番南京船<sup>13)</sup>は、靖南王が清朝側に降伏したことや「私共如き之商人共南京より荷物少し自由に取り出し候事も難成御座候」<sup>14)</sup>、この船の商人達は南京から積荷を僅かにも自由に持ち出すことが出来なかったと、遷界令下では商品の集荷も困難であったことがわかる。同三月十三日の2番南京船<sup>15)</sup>は、福州の靖南王が清側に降伏した事情と鄭成功側の状況を伝えた<sup>16)</sup>。

延宝六年（康熙17、1678）四月十日の「三番南京船頭彭公尹船之唐人共申口」<sup>17)</sup>は、呉三桂側の状況を述べるとともに「私共船之儀も南京川口崇明と申所に乗参候船」<sup>18)</sup>とあり、この船も南京の河口の崇明と言う所において乗船したとあるように、南京とは広域な地名であることが解り、その一箇所の崇明すなわち崇明島から出帆してきたのであった。

延宝七年（康熙18、1679）六月十五日の5番南京船<sup>19)</sup>は、「私共船之儀、今度南京之内崇明縣と申所より仕出し申候」<sup>20)</sup>と、この船は南京の治下の崇明縣と言う所から出帆してきたとあるように、この船も南京船と呼ばれたが出帆地は崇明島であった。

天和元年（康熙20、1681）九月に薩摩（鹿児島県）に漂着して破船し、薩摩から小船に分散して長崎に送られてきた南京船の乗員は、「私共之儀も、南京之内、鎮口と申所より、ひそかにしのび候て、今度之船を仕出し申候」<sup>21)</sup>と、この船は、南京の治下の鎮口と言う所から人目を避けて秘密裏に出帆してきたとあるように、南京治下の鎮口おそらく鎮江から密かに出帆してきた船であった。

天和二年（康熙21、1682）四月九日の1番南京船は、「南京之内、任家江と申江之渡り御座候」<sup>22)</sup>と、この船は南京治下の任家江と言う川から来航したとあるように、南京付近の任家江という船の渡し場から出帆してきたと思われる。さらに「江南方之渡し口福山と申候、江北方之渡し口則任家江と申候」<sup>23)</sup>とあり、江南側の船の渡し場の福山と言う所、江北側の船の渡し場である任家江と言う所とあり、長江下流域の常熟の福山と対峙した対岸の現在の南通に位置する地に任家江があったと思われる。長江口に近い南通の小さな港から長崎に向けて出帆してきたことがわかる。

天和三年（康熙22、1683）九月九日の22番南京船は、南京船と称しているが、南京とは程遠い山東からの船であった。

私共船之儀者、洪汝昭と申者船頭仕、大清之内、山東と申國之内、諸城と申所より仕出し申候。<sup>24)</sup>

この船の船主は洪汝昭であり、清国の山東の諸城から出帆して来たと報告している。この康熙二十二

13) 『華夷変態』上冊、174-175頁。

14) 『華夷変態』上冊、174-175頁。

15) 『華夷変態』上冊、175-177頁。

16) 『華夷変態』上冊、176-177頁。

17) 『華夷変態』上冊、197-199頁。

18) 『華夷変態』上冊、198頁。

19) 『華夷変態』上冊、294-295頁。

20) 『華夷変態』上冊、294頁。

21) 『華夷変態』上冊、332頁。

22) 『華夷変態』上冊、339頁。

23) 『華夷変態』上冊、340頁。

24) 『華夷変態』上冊、409（408-410）頁。

年頃になると海禁である遷界令が多少緩和されたのか、沿海航運は認められたようで、この船は山東から遼東へ交易に赴くと言って官憲に許可され山東を出帆した<sup>25)</sup>。山東の諸城と述べているが、清代において諸城縣は青州府下に属し、黄海に面しているのが諸城縣のみで、治所は内陸部にあり、有名な瑯琊台以西の小港が若干ある。おそらく諸城と言ったが諸城縣治下の小港から出帆したと思われる。

貞享元年（康熙23、1684）十二月四日の24番南京船は、江南から来航したと思われるが、出帆港は不明である。この船も官府の許可を得ず出港してきた。しかし、出港は従来より随分緩和されたことを伝えている<sup>26)</sup>。

貞享二年（康熙24、1685）二月八日の二番南京船は、台湾の鄭克塽とその配下が清に降り平定されたことを伝え、その出港地について以下のように報告している。

今度私船仕出し申候處、浙江之内寧波府と申所にて御座候。<sup>27)</sup>

この2番南京船が出帆した所は、浙江の中の寧波府治下の港であったと報告したように、南京船と称されたが寧波からの船であった。

同年三月十八日の8番南京船は「南京仕出しの船」<sup>28)</sup>と南京出帆船と言うが、その出港港名は不明で、この船も「魚船に紛しのび出申候」<sup>29)</sup>と、魚船に紛れて秘密裏に出帆して来たと報告している。

同年六月五日の15番南京船も出港地は、「南京仕出之船」<sup>30)</sup>と、南京出帆の船とあるのみで、不明である。同年の18番南京船については、つぎのようにある。

私共船五月二十六日に南京の内、蘇州と申所より仕出し申候……<sup>31)</sup>

この船は五月二十六日に南京の内の蘇州と言う所より出帆して来たと、蘇州からの出帆であると報告している。おそらく蘇州河を使い長江口に出て、東海を渡航してきた南京船であったのであろう。

貞享二年八月付の「拾番ヨリ五十一番までの唐人共願出和ケー（十番より五十一番までの唐人たちの願書の和訳一）」によれば、15番船が欠落しているが、この41隻の唐船の船主等が、総売上銀6,000貫目を上限として貿易を許可されるように長崎奉行に上申した<sup>32)</sup>。その中に南京船とあるのは、13番南京船頭魏拱辰、18番南京船船頭韓震範の2隻のみで、厦門船が20艘、福州船が9艘、廣東船が2艘、寧波船が2艘、泉州船が2艘、普陀船が1艘、咬啗吧船が1艘、麻六甲（Malacca）船が1艘、暹羅船が1艘<sup>33)</sup>であり、ほとんどが華南以南の船であった。南京船の割合が低いことが解る。

同年九月八日の60番南京船のその出港地は不明であるが、つぎのように報告している。

南京より御當地への渡船、順風能時分は、三日四日、又はおそく御座候ても、十日の前後には罷渡

25) 『華夷変態』上冊、409頁。

26) 『華夷変態』上冊、443-444頁。

27) 『華夷変態』上冊、451-454頁。

28) 『華夷変態』上冊、462頁。

29) 『華夷変態』上冊、462頁。

30) 『華夷変態』上冊、471頁。

31) 『華夷変態』上冊、474頁。

32) 『華夷変態』上冊、501-506頁。

33) 『華夷変態』上冊、504-506頁。



り申候……<sup>34)</sup>

ここでは、南京から長崎への渡海の船は、順風が得られる季節であれば、三日か四日の日数にて長崎に到着し、また遅くなくても十日前後で到着することが出来ると報告していたことから、江南から長崎への航行日数は3-4日もしくは10日前後で東海を渡航できたのであった。

同年九月二十二日の64番南京船は、「私共も今度呉松にて、客荷物を招集」<sup>35)</sup>と、この船は出港時の長江口の呉淞において客商や荷物を集めたと報告したように、長江口の呉淞江口から出帆してきている。続いて来航した66番南京船、67番南京船、68番南京船も呉淞から来航したと報告した<sup>36)</sup>。これらに続いた69番南京船は崇明からの出帆であった<sup>37)</sup>。十一月五日の74番南京船と同六日の76番南京船は呉淞から出帆して長崎に来航した<sup>38)</sup>。

以上の南京船は、全て現在の南京から来航した船では無く、長江口にあった様々な小港から出帆し、長崎に来航した。その理由は清朝による遷界令のために、正式には海外に渡航できず、いずれも長江口付近の小港から秘密裏に長崎を目指して来航してきたものであった。

これに対して、次節で述べるように上海から来航した南京船が出現する。

### 三 江戸時代に上海港を出帆して長崎に来航した商船

#### 1 長崎来航の上海出港の商船

日本の記録で、最初に上海から長崎に来航したことが解る船が、貞享二年（康熙24、1685）十一月十九日の79番南京船である。

私船之儀、南京之内、上海と申所より、當月三日に出船仕罷渡り申候。<sup>39)</sup>

この79番南京船は、南京治下の上海と言う所から、十一月三日に出帆して来たのであった。同船が、上海から出帆してきたことがわかる早期の例である。

ついで上海から出帆してきた船がわかるのは、貞享三年三月二十二日の24番南京船である。この船は、私船之儀、南京之内上海縣と申所より、三月八日に出船仕候處に、洋中順風無御座候て、漸今日入津仕申候。<sup>40)</sup>

この船は、南京治下の上海縣から、三月八日に出帆したが、海上において順風を得られず、ようやく三月二十二日に長崎に入港したのである。上海縣から出帆したが海上で順風が得られ無かったので、時間がかかり14日を要して長崎に入港した。さらに、つぎのように報告している。

私出船仕候上海縣より來朝之商賣船、今壹艘毛希宰と申者船、私船より三日前に出船仕候得共、最

34) 『華夷変態』上冊、516頁。

35) 『華夷変態』上冊、521頁。

36) 『華夷変態』上冊、522、523、524頁。

37) 『華夷変態』上冊、524-525頁。

38) 『華夷変態』上冊、528-529、530頁。

39) 『華夷変態』上冊、533頁。

40) 『華夷変態』上冊、562頁。

も順風無御座故、今日迄も入津不仕と奉存候、上海縣より當分來朝之船も無御座候。尤日本へ志し申候船頭共は、今一兩人も御座候得共、舊冬御當地より罷歸申候客共之物語に、御當地商賣之様子承候て、當分は日本へ志し申候客共もすくなく御座候に付、船仕出し申事も罷成不申候。<sup>41)</sup>

24番南京船が出帆した上海縣から来往する交易船は、他に一隻毛希宰と言うものの船があった。同船より三日前に出帆したが、順風が得られず、三月二十二日まで長崎に入港していなかった。この2隻の他には、しばらくの間は、上海縣から長崎に来航する船はなかったようである。しかし日本長崎へ渡航したいと希望する船主たちは、他に一、二人いたようである。前年の冬に長崎から戻って来た商人たちの報告に拠れば、長崎での交易の様子を聞いて、しばらくの間は日本へ渡航する商人たちは少なく、船の出帆も無いとされたとあり、上海から長崎へ渡航する商船が、少しずつ増えてきた。しかしその数は少数であった。

つぎの表1に示したように、展海令発布後において上海から日本の長崎へ来航する商船が増加していくのである。

表1 1675-1686年長崎来航の南京船一覧

西暦	日本暦	中国暦	南京船	船主	出港地	出典
1675	延宝03	康熙14	20番南京船			上0121
1675	延宝03	康熙14	29番南京船		普陀山	上0140
1676	延宝04	康熙15	4番南京船	彭公尹	崇明	上0149
1677	延宝05	康熙16	2番南京船			上0177
1678	延宝06	康熙17	3番南京船	彭公尹	崇明	上0198
1679	延宝07	康熙18	5番南京船		崇明縣	上0294
1681	天和01	康熙20	破損南京船		鎮口	上0331
1682	天和02	康熙21	1番南京船		任家江	上0339
1683	天和03	康熙22	27番南京船	洪汝昭	山東・諸城	上0409
1684	貞享01	康熙23	24番南京船		寧波	上0444
1685	貞享02	康熙24	2番南京船		寧波	上0454
1685	貞享02	康熙24	8番南京船			上0462
1685	貞享02	康熙24	15番南京船			上0471
1685	貞享02	康熙24	18番南京船	韓震昭	蘇州	上0474, 0504
1685	貞享02	康熙24	13番南京船	魏拱辰		上0504
1685	貞享02	康熙24	60番南京船	東輝初		上0516, 0675, 0728, 0847
1685	貞享02	康熙24	64番南京船		吳淞	上0521
1685	貞享02	康熙24	66番南京船		吳淞	上0522
1685	貞享02	康熙24	67番南京船		吳淞	上0523
1685	貞享02	康熙24	68番南京船	郭斗懸	吳淞	上0524, 0763
1685	貞享02	康熙24	69番南京船		崇明	上0525
1685	貞享02	康熙24	74番南京船		吳淞	上0528
1685	貞享02	康熙24	76番南京船		吳淞	上0530
1685	貞享02	康熙24	79番南京船		上海	上0533
1685	貞享02	康熙24	80番南京船		通州	上0533

41) 『華夷変態』上冊、562頁。

1686	貞享03	康熙25	1 番南京船		普陀山	上0544
1686	貞享03	康熙25	3 番南京船	呉子彦	崇明	上0545, 0826
1686	貞享03	康熙25	7 番南京船	張萃吾	通州	上0548, 0692
1686	貞享03	康熙25	8 番南京船		通州・北沙	上0549, 0739
1686	貞享03	康熙25	9 番南京船	賀天瑞	呉淞	上0550, 0663
1686	貞享03	康熙25	11番南京船	呂公濟	通州・北新港	上0551, 0684
1686	貞享03	康熙25	13番南京船	謝芬如	呉淞	上0553, 0727, 0759, 0827
1686	貞享03	康熙25	19番南京船		呉淞	上0558
1686	貞享03	康熙25	23番南京船		呉淞	上0561
1686	貞享03	康熙25	24番南京船	謝沅澁 呉子昭	上海	上0562, 0688, 0727, 0750
1686	貞享03	康熙25	28番南京船		浙江・海鹽縣	上0565, 0730, 0819
1686	貞享03	康熙25	29番南京船		上海縣	上0566
1686	貞享03	康熙25	37番南京船		蘇州	上0571
1686	貞享03	康熙25	43番南京船		呉淞	上0576
1686	貞享03	康熙25	49番南京船	徐俊生	上海縣	上0582, 0672
1686	貞享03	康熙25	57番南京船		蘇州	上0590, 0814
1686	貞享03	康熙25	64番南京船	汪以介	上海縣	上0597, 0681, 0741
1686	貞享03	康熙25	68番南京船		上海縣	上0602, 0810
1686	貞享03	康熙25	96番南京船	諸君贊	北沙	上0637, 0720, 0806
1686	貞享03	康熙25	99番南京船		上海縣	上0645, 0677

## 2 上海と日本との関係

上海の港と日本との関係について中国史料から見てみたい。

乾隆『上海縣志』卷二、水利、海の項目に、

海在縣東七十里、北起嘉・寶、南抵華・奉、爲縣所轄、松江與黃浦合流入焉。混茫無際、東接諸番、惟日本最近。<sup>42)</sup>

とあるように、上海からの諸外国の中で、最も近い国が日本であると明記している。そして台湾鄭氏が清朝に降ると「弛海禁、通商販、設榷權衡」<sup>43)</sup>と、海洋貿易を認め、榷關すなわち税関を設置するのである。康熙二十四年（貞享2、1685）には、

康熙二十四年、於捐納之事例已停等事案内詔弛海禁、九卿會議、江南設海關于上海、耑司一切。<sup>44)</sup>と、江南海関が上海に設けられている。江南海関の所轄は、蘇州、松江、常熟、鎮江、淮安、揚州の六府と太倉、通州の二州に及び海口は呉淞・劉河等二十二箇所があった<sup>45)</sup>。

上海の港であるが、嘉慶『上海縣志』卷一、風俗に、

自海關通貿易、閩粵浙齊遼海間及海國舶慮劉河淤滯、輒由呉松口入、艤城東隅、舳艫尾銜、帆檣如

42) 上海市地方志辦公室等編『上海縣卷』全五冊、第一冊、2015年11月、390頁。

43) 乾隆『上海縣志』卷四、關榷、上海市地方志辦公室等編『上海縣卷』全五冊、第一冊、526頁。

44) 上海市地方志辦公室等編『上海縣卷』第一冊、526頁。

45) 上海市地方志辦公室等編『上海縣卷』第一冊、526頁。



櫛、似都會焉。<sup>46)</sup>

とあるように、海関が開かれ福建、廣東、浙江、山東、東北からのみならず海外の商船が来航するが、劉河が土砂により堆積し、入港が困難になると、呉松口から進航し上海縣城の東隅に停泊するようになって一都會のようになったとあることから、現在の黄浦江岸に南市付近が埠頭として注目されたのであった。

康熙四十年（元禄14、1701）に、中国から多くの商船が日本長崎に渡航することの情報を得た康熙帝が、密偵を日本へ遣わしている<sup>47)</sup>。その手配をした蘇州織造李煦が、康熙四十年六月に、

臣煦等恐從寧波出海、商舶頗多、似有招搖、議從上海出去、隱僻爲便。<sup>48)</sup>

とあるように、李煦は密偵を日本へ派遣するに際して派遣する密偵が搭乘する商船にどこから乗船させるかについて、寧波では商船が多く、人目につきやすいから、商船数が少ない上海から日本へ渡航する商船に搭乘させるのが最適と考えたのであった。

このころの上海は、寧波よりも商船も少ない港であったことがわかる。

ちなみに、貞享元年（康熙23、1684）から寶永二年（康熙44、1705）までの間における長崎へ来航した毎年の唐船総数と上海から出港してきた商船の数を表2、図1に示してみた。

表2 1694-1705年長崎来航唐船数と上海出港船数の比較

西暦	日本暦	中国暦	上海出帆唐船数	長崎来航唐船数
1684	貞享01	康熙23	0	24
1685	貞享02	康熙24	15	75
1686	貞享03	康熙25	6	102
1687	貞享04	康熙26	26	127
1688	元禄01	康熙27	22	194
1689	元禄02	康熙28	14	79
1690	元禄03	康熙29	11	90
1691	元禄04	康熙30	16	90
1692	元禄05	康熙31	8	73
1693	元禄06	康熙32	13	81
1694	元禄07	康熙33	6	73
1695	元禄08	康熙34	4	61
1696	元禄09	康熙35	2	81
1697	元禄10	康熙36	8	103
1698	元禄11	康熙37	19	71
1699	元禄12	康熙38	22	73
1700	元禄13	康熙39	23	53
1701	元禄14	康熙40	22	66
1702	元禄15	康熙41	13	90

46) 上海市地方志辦公室等編『上海縣卷』第二冊、841頁。

47) 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、77-97頁。

松浦章著・張新芸譯『清代帆船與日中文化交流』上海科学技術文献出版社、2012年1月、49-62頁。

48) 故宮博物院明清檔案部編『李煦奏摺』中華書局、1976年5月、17頁。

1703	元禄16	康熙42	7	80
1704	寶永01	康熙43	15	84
1705	寶永02	康熙44	9	88

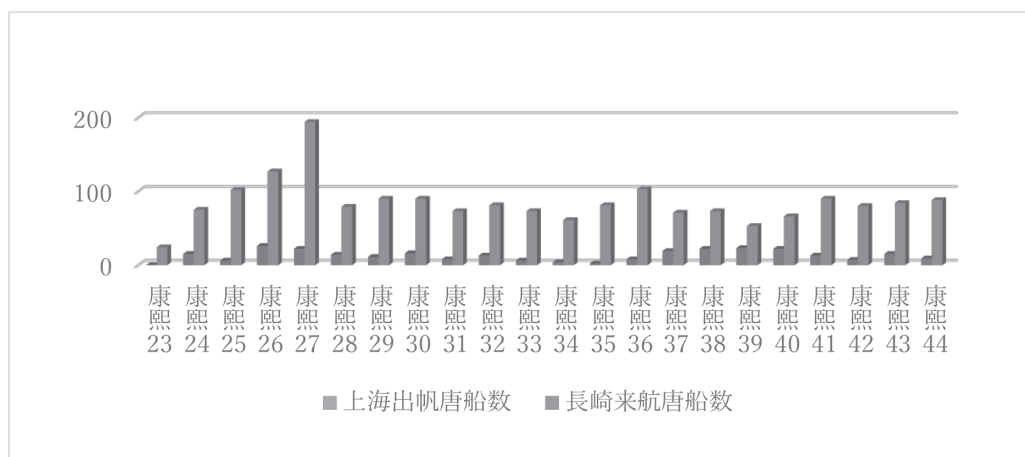


図1 1684-1702年上海出港船の長崎来航数推移

表2及び図1からも明らかなように、上海を出帆して長崎に入港したことがわかる最初の貞享二年（康熙24、1695）十一月十九日の79番南京船から、その後二十年間に決して多くは無いことがわかる。最も多かったのが、元禄十三年（康熙39、1700）の総数53隻に対して、上海船は23隻と43%をしめたのが最大であった。

上海から長崎へは海上航路の距離は近かったが、国内交易の利便性などから見て、寧波より歴史的に不利な状況にあった。寧波は国内交易においても永い歴史を保有して、商業施設なども上海より発展していたことによるであろうか。

上海港から出帆し長崎へ来航した商船は、どのような貨物を搭載していたかについて、残された記録は多くは無い。その中でも草創期の記録がわかる正徳元年（康熙50、1711）33番南京船の場合を見てみたい。同船は正徳元年六月六日に長崎に入港した。

私共船之儀は、南京之内上海にて仕出し、唐人数四拾壹人乗組候て、當五月廿六日彼地致出帆渡海仕候。……日本之地何國へも船寄せ不申、直に今日致入津候、船頭陳世樞は、去年拾七番船より船頭仕罷渡り申候、乗渡之船は、初て致渡海候。<sup>49)</sup>

この船は、南京治下の上海から出港してきた。乗員の唐人数は41人が乗船し、正徳元年五月二十六日に出帆し渡海してきた。そして日本の地のいずれの所にも寄港せず、ただちに六月六日に長崎へ入港した。船主の陳世樞は、前年の17番船の船主を務めたが、乗船してきた船は初めて日本へ来航したのであった。この33番南京船は五月二十六日（1711年7月11日）に上海を出港し、六月六日（7月21日）<sup>50)</sup>に長

49) 榎一雄編『華夷変態』下冊、東方書店。1980年11月再版、3020頁。

50) この年の清暦と日暦とは五月、六月の朔日の干支は同じである。内務省地理局編纂『三正總覽』による。

崎に入港している。長崎・上海間を10日間の航海であった。この船が長崎に入港し、積載してきた貨物の一覧が『唐蠻貨物帳』に見られる。なお船頭名が陳世樞と陳世旭と相違が見られる。

正徳元卯年 三十三番南京出シ

唐船貨物改帳 船頭陳世旭 人数四拾壺人 六月十六日

一白糸 五百五拾斤 一大飛綾さや 四百端……一大白ちりめん 百九十端……一薬種  
色々 壺万式千三百斤 一人参 百四斤……一黒砂糖 五万四千斤……一唐紙 百米 一小間物道  
具 式箱……以上

正徳元年卯六月十六日 唐通事 印<sup>51)</sup>

と見られるように、白糸すなわち白絲やさや（紗綾）そしてちりめん（縮緬）など絹織物や漢方薬剤そして黒砂糖の他に中国製紙を積載してきた。

積荷の中で特徴的なものは黒砂糖54,000斤約32.4噸である。上海近郊ではこのような黒砂糖は集荷されなかったであろう。その黒砂糖はどこから入荷したものであろうか。このことに関して、乾隆十八年七月初四日付の提督江南總兵官左都督林君陞の奏摺に、

查劉河・川沙・呉淞・上海各口有閩粵糖船、肆伍月南風時候來江貿易、玖拾月間置買棉花回棹、  
……<sup>52)</sup>

とあるように、毎年、四月、五月になり南風が吹く季節に長江口の港である劉河や川沙、呉淞や上海などに福建、廣東省から砂糖を積載した商船が来航し、これらの商船は九、十月頃には長江口特産の棉花を積載して帰帆すると述べている。このことから明らかなように、上海には四、五月頃に福建、廣東省から砂糖が船載されていたのであった。おそらくその砂糖を日本の長崎に向けて出荷していたと考えられる。

正徳元年の15番南京船、船主鍾聖玉、乗員34人の積荷に関する「唐船貨物帳」六月三日付の積載貨物に白糸780斤などの他に書物93箱があった<sup>53)</sup>。この船が「南京出シ（南京から出帆）」とあることから、上海を出港してきたものと思われる。鍾聖玉は寶永六年（康熙48、1709）年三月九日に長崎に入港した28番南京船により来航した。この船は上海から来航している<sup>54)</sup>。このことから正徳元年15番船も上海出帆の船であったことは確かであろう。

ついで正徳元年の51番南京船、船主程方城、乗船数34人の場合は、七月三日に上海を出港し、七月八日に長崎に入港した<sup>55)</sup>。上海・長崎間を五日間で航海してきたのであった<sup>56)</sup>。この船は、白糸6480斤、大白ちりめん50端、尺長中白縮緬720端、中白ちりめん745端、小白ちりめん800端、色どんす（緞子）500端、白綾しや（紗）壺端、薬種色々380斤、丹450斤、唐紙2束、書物40箱<sup>57)</sup>を積載してきた。この船の

51) 『唐蠻貨物帳』上冊、内閣文庫、1970年3月、453-458頁。

52) 『宮中檔乾隆朝奏摺』第5輯、国立故宫博物院、1996年9月、689頁。

53) 『唐蠻貨物帳』上冊、326-336頁。

54) 『華夷変態』下冊、2610頁。

55) 『華夷変態』下冊、3036-3037頁。

56) 清暦、日暦ともに朔日は同日。

57) 『唐蠻貨物帳』上冊、686-688頁。

積荷の特徴的なものは書籍40箱を日本長崎へ舶載してきたことである。

正徳元年に長崎に来航し、交易を行った54隻の中で、書籍は全数量、139箱2部であった<sup>58)</sup>。正徳元年の15番南京船が書籍93箱、51番船が40箱と合計133箱さらに同年の25番南京船、船主兪牧吉、乗員41人も「書籍奩箱」を積載していた。この正徳元年の長崎来航唐船の書物を積載していた船次に一覧にしてみた。

表3 正徳元年長崎来航唐船の書物積載数

唐船番数	出帆地	船主名	乗員数	書物部数	唐蠻貨物帳
正徳元年10番	寧波出シ	船主齊箕公	人数35人	書物2部	上冊、294
15番	南京出シ	船主鍾聖玉	人数34人	書物93箱	上冊、333
19番	寧波出シ	船主謝子攀	人数45人	書物4箱	上冊、356
25番	南京出シ	船主兪牧吉	人数41人	書物1箱	上冊、392
37番	寧波出シ	船主王國官 王能珍	人数43人	書物1箱	上冊、494
51番	南京出シ	船主程方城	人数34人	書物40箱	上冊、688
			書物合計	139箱2部	

全体の98%もの割合を示す量の書籍がいずれも南京船に搭載されていたことがわかる。上海や寧波からの船が多く、漢籍を日本にもたらしていたことがこの一端からも知られるのである。

正徳元年に初めて日本へもたらされた書籍に康熙『江南通志』がある。康熙『江南通志』は全76巻、于成龍等修で、康熙二十三年（1684）に江南通志局刻本とされる<sup>59)</sup>。「商舶載來書目」には、「江南通志一部六套」とある<sup>60)</sup>。享保三年（康熙57、1718）に再び舶載され、その時の長崎の「享保三年七月大意書草稿」には、つぎのようにある。

一江南通志 一部六套三十六本

右ハ江南省ノ通志ニテ御座候。江南省ハ明朝ノ南直隸ニテ清朝ニ改メテ江南省ト仕候、此書正徳元年初テ渡リ候書ニテ御座候。<sup>61)</sup>

この書は江南省の通志であり、江南省は明朝の時の南直隸であって、清朝に改められ江南省となっている。同書は正徳元年に初めて舶載されたとあるように、江南通志の日本への舶載の最初は正徳元年であった。さらに正徳元年51番船の舶載書籍の内容がわかる記録が知られる。『舶載書目』に51番船のものとして、

易經講意去疑、全補發微曆、先聖大訓、唐詩正、集古印譜、譚友夏合集、江南通志、詩觀初集、易学義林、韓文起、李杜詩通、三蘇文範、唐宋八大家文鈔選、易学正傳、歷朝賦楷、周忠毅公奏議、篇海類編、戰國策、……<sup>62)</sup>

58) 山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964年4月、115頁。

59) 中国科学院北京天文台主編『中國地方志聯合目錄』中華書局、1985年1月、309頁。

60) 大庭脩編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967年3月、704頁。

61) 大庭脩編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』273頁。

62) 大庭脩編著『宮内廳書陵部蔵 舶載書目 上』関西大学東西学術研究所、1972年1月、舶載書目十三、十四、1-14

とある書目が見られ、このうち江南通志には「江南通志 二十六本 七十六卷 王新命 純嘏 序 康熙二十三年 王新命 于成龍此溟」<sup>63)</sup>とあるように、康熙二十三年序刊本であることは確かである。このことから「江南通志 二十六本 七十六卷」本は正徳元年51番船によって日本にもたらされたことは明らかである。

そうすると康熙二十三年（1684）に江南通志局において出版されたものが、正徳元年（康熙50, 1711）に舶載されたのである。27年後のことではあるが、清朝の地方政府の出版物であったためか、容易に民間に流布はしなかったためと思われる。現在の中国の研究機関でも所蔵するのは10数カ所と決して多くはない<sup>64)</sup>。現在、東京の国立公文書館内閣文庫には康熙二十三年序刊の『江南通志』七十六卷、が徳川幕府の旧紅葉山文庫旧蔵書として36冊本が所蔵されている<sup>65)</sup>。

先の正徳元年の15番、25番、51番の南京船のいずれかによって康熙『江南通志』が日本の長崎へもたらされ、それが徳川幕府によって購入され、幕府の紅葉山文庫に収められた可能性が極めて高いことが考えられる。そうすると同書は上海で長崎への唐船に積み込められ、東シナ海を渡り長崎に到り、長崎から江戸へそして幕府の所蔵となったのであった。上海が文化伝播の一起点となったと言える。

#### 四 小結

上述のように、江戸時代の長崎に来航した上海出帆の唐船について考察してみた。江戸時代前半において日本では上海はほとんど知られていなかった。上海が日本人にとって視野の中に入るのは、幕末のことで、幕府が文久二年（1862）に官船千歳丸を上海に派遣<sup>66)</sup>して以降のことと思われる。そのため江戸時代前中期の記録に上海の名が見られるのは希なことであった。

清朝が台湾を平定して海禁を解除した展海令発布前の日本へ来航した南京船と称された唐船は、江南の長江口の諸港から来航してきた。そして展海令直後の貞享二年（康熙24、1685）十一月十九日に長崎に来航した79番南京船が「私船之儀、南京之内、上海と申所より、當月三日に出船仕罷渡り申候」<sup>67)</sup>と長崎で報告したように、この船がおそらく最初に上海を出帆して長崎に来航してきた唐船であったと考えられる。その後の南京船はほぼ上海から出帆して長崎に来航する唐船によって占められた。当時の上海は寧波に比較して多くの商船が出入する港ではなかった。しかし展海令発布において沿海のみならず日本貿易の一つの窓口として漸次繁栄していったようである。上海は長江口にも近く、日本へも最短距離にあったことも大いに関係していた。長江水運との利便性や巨大経済市場の蘇州からも内河水運で近距離にあったことも貿易品の集荷や散荷に適していたためであろう。

（1-42）頁。

63) 大庭脩編著『宮内廳書陵部蔵 舶載書目 上』舶載書目十三、十四、6-7頁。

64) 中国科学院北京天文台主編『中國地方志聯合目錄』309頁。

65) 『改訂内閣文庫漢籍分類目録』内閣文庫、1971年3月、110頁。

66) 松浦章「『上海新報』に見る幕末官船千歳丸の上海来航」、松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、387-413頁。

67) 『華夷変態』上冊、533頁。



しかしその後、雍正年間になると沿海に臨する乍浦から出帆して長崎に来航する唐船が徐々に増加し、乾隆中後期から咸豊年間まで長崎に来航する唐船はほとんどが乍浦から長崎に入港したのであった<sup>68)</sup>。

そのため、上海から長崎に直航した唐船は康熙中期から雍正年間までの船に限定される。その上海から長崎に直航してきた南京船は、先に述べたように、江南で出版された書籍を貿易品として日本へもたらした可能性は極めて高いと言えるであろう。その上海から来航した南京船は、先に『増補華夷通商考』に掲げられた平底型の沙船であったと言える<sup>69)</sup>。

---

68) 松浦章「清代浙江乍浦における日本貿易と沿海貿易の聯関」、松浦章『清代帆船沿海航運史の研究』関西大学出版部、2010年1月、407-421頁。

69) 松浦章『清代上海沙船航運業史の研究』関西大学出版部、2004年11月、63-75頁。